

図工・美術指導の可能性を広げる情報誌

造形ジャーナル

ZOKEI JOURNAL

2014
Vol.59-4
No.424



「地球温暖化防止ポスター」2007年 まだ よして 儘田 能光
作家は表紙裏のART ESSAYを執筆しています

特集 キラリを育てる

開隆堂

ユーモアが心に訴えかける



まだまだよして
徳田 能光 (グラフィックデザイナー)

デザインの仕事と並行して地球温暖化、原発、戦争などの問題をテーマにポスターやチラシ、カード、絵本などを制作し、訴えている。立体作品も手がけ、毎年個展を開催。企画展にも多数出品し、幅広い創作活動を続けている。

2002年に環境ポスター展に参加したのがきっかけで、環境問題を考えるようになりました。特に、地球温暖化は生命にとって深刻な問題です。急増するゲリラ豪雨や巨大竜巻も地球温暖化が原因とされています。温室効果ガスの排出量がこのまま増え続けると、今世紀末までには日本の気温は3.5～6.4度上昇するという報告書が公表されました。降雨量は9～16%増え、海面は最大63cm上昇し、砂浜の8割が失われるそうです。私たちの世代より子どもや孫の世代に大きな影響を与えることとなります。今を生きる私たち一人ひとりの行動にかかっています。

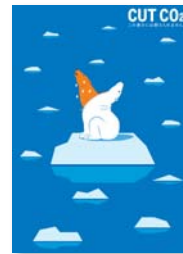
この現状を多くの人に知ってもらいたいという思いから地球温暖化をテーマにしたポスターを制作し、市や区の施設のホールやギャラリー、病院などで環境ポスター展を開催しています。渋谷区のスポーツ施設で展示したときには区長のはからいで、展示したポスターの中から5点を選び、印刷をして東京都渋谷区の小・中学校全校に配布されました。

表紙に掲載されたポスターは、動物たちの視点から地球温暖化を訴えたシリーズの1点です。南極半島の両側で氷棚の大きな崩壊が起きています。いったん氷

棚がなくなると、その後ろで抑えられていた陸上の氷がじりじりと移動し始め、海に砕け落ちるようになります。海水面が上昇を続け、海に近い多くの都市が水没の被害にさらされることとなります。この危機をペンギンたちに参加してもらい、ポスターにしました。

ポスターの制作で心がけている点は、一目見てメッセージが伝えられるかということです。そして、その中にクスッとしてしまうようなユーモアを盛り込めたらと思い、制作しています。ユーモラスな表現があると強く心に残ると思います。

ポスターを見て行動を起こしてもらおうのはとても難しいことですが、少しでも環境問題について考えるきっかけになってもらえたらと願っています。



環境問題を訴えるポスター

CONTENTS

2014 Vol.59-4 No.424

特集 子どもの“キラリ”を求めて 第4回 キラリを育てる

- ▶子どもが自分のキラリに気づく時…
 京都教育大学附属京都小中学校 足立 彰 …… 2
- ▶子どもの「楽しい」「うれしい」ひととき
 東京都立三鷹中等教育学校 南 弥緒 …… 4
- ▶社会とつながる表現～共感の場づくりから～
 静岡県静岡市立観山中学校 山竹 弘己 …… 6
- ▶児童・生徒がキラリと輝く授業
 宮城県登米市立佐沼中学校 矢崎 ひさ …… 8

私のお気に入りの1点 五角形の箸

東京都江東区立越中島小学校 大道博敏 …… 10

これだけは知っておきたい **本編** …… 11

教材研究 小学校

和の図工 -図工の和-
 東京都豊島区長崎小学校 北角 きよ子 …… 12

教材研究 中学校

自分や自分のいる場所に向き合い、輝きに気づく
 東京都西東京市立保谷中学校 清水 信博 …… 14

図工室・美術室

小中一貫校の試み～小学校と中学校の連携～
 新潟県三条市立嵐南小学校 島田 洋子 …… 16

心あたたまる絵本をつくらう～自分を見つめ、自分を語る～
 北海道札幌市立稲隆中学校 市川 雅基 …… 16

今月の見つけたよ!

「川立つ木」 …… 17

地域のアート

「小・中・高連携による造形活動～はらべこあおむしの食べたリンゴ～」
 …… 17

特集

子どもの“キラリ”を求めて



第4回

キラリを 育てる

その一瞬にカメラを向けると、子どもの瞳から発する「キラリ光線」を写し出すことができるかもしれない。漫画の一コマであれば画面に星が描かれるだろう。心がキラリとする活動はさまざまな場面や設定で生まれ、つくり出される。新しい発見や気づきは大人でさえ心が踊る。子どもの純粋な感覚や感性をもってすれば、未知なる授業は想像以上の「キラリ」を投げかけ、心がときめく瞬間であるに違いない。

キラリを主体的な表現に結びつけるため、教師が何を引き出すか、どう仕掛けをつくるかが、図工・美術の時間の醍醐味である。「子どものキラリ」に気づき、しっかりと受け止め、限りない力を育て伸ばすための図工・美術の授業でありたい。

はじめに

毎年数多くの教育実習生が勤務校にやって来る。その実習生が授業を計画する際、最初に行う助言が「褒める言葉をたくさん用意しておいてください」である。それは、形式的な言葉を用意することではなく、「褒める言葉」が生徒の心に響く言葉であるために、教材を研究し展開の工夫や準備を進めておくことに他ならない。

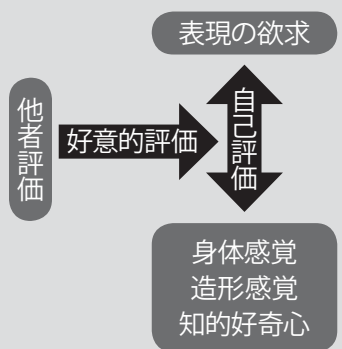
そもそも生徒の創造活動の喜びとはどこから生まれてくるものなのだろうか。人は本来、造形活動を楽しむ欲求をもって生まれてくる。そのため幼い時には、泥遊びや紙を丸めて「〜みたい」という身体感覚や造形感覚を満足させることが表現欲求を満たす活動としてしばしば見られる。

しかし、学年が進むにつれて、「絵は苦手」「アイデアが思いつかない」等の発言をする子が増えていく。以前、成人に行った調査では、「造形表現が苦手だと思わない」に対して「はい」と回答した人は、「いいえ」と回答した人に比べて、圧倒的に

子どもが自分のキラリに気づく時…

京都教育大学附属京都小中学校 あたち あきら 足立 彰

「親や身近な人によく褒められた（ことを覚えている）」という回答が多い。これは、他者による評価が自己評価と深い関わり合いをもちながら造形表現への自信を培うことになることを示している。ということは、生徒から生み出される多様な表現を適切に評価することができ



ば、生徒はより造形を楽しみながら学習を行えるということではないだろうか。

以上のことから、生徒が表現することを楽しみ、「自分の表現」が友達に好意的に評価される授業を行うことで、生徒は自分の内にある「表現の意図」や「創造活動の喜び」に気づくことになるのではないかと考え、次のような実践を行った。

実践紹介（中学2年生）
「トレーディングアートカードゲームをつくる」

本題材は、デカルコマニー・ドリッピング等の偶発的な表現のおもしろさをもつ技法と、それらを意図的に構成するためのコラージュ・マスキング等の技法を組み合わせ、3種類のイメージを表現させようとするも

のである。3種類のイメージはジャンケン（石・はさみ・紙）をモチーフにし、ゲーム的な要素をもったカードをデザインさせ、完成後にゲーム交流を行わせる。そのゲームを通じて自他のイメージの交感を行い、相互の感性の違いや一般的な形や色のイメージの共通性について理解を深めることを意図した。

具体的には、ジャンケンゲームにおける石（ゲー）・はさみ（チョコキ）・紙（パー）から連想するイメージを、一旦「言葉のイメージ」に置き換え、さらにそこから形や色のイメージへと転換させていく。この過程で自分自身のイメージの捉え方を友達との感じ方や考え方と交流させ、共通する形や色のイメージや、友達とは異なるが自分としては大切にしたい感じ方や考え方を整理させた。

当然、形や色の捉え方は、一人一人の好みによって違いがあり、一律にゲー・チョコキ・パーのイメージが決められるものではない。だからこそ、ゲーム的な交流を通じて自分なりの感じ方や考え方（感性）を説明することで、自らの捉え方を友達と



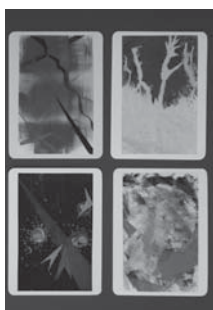
友達の表現を見合うことで、次の表現が生まれる。

の間で一般化していくことが大切と考えたからだ。

ゲームは、対戦する2名と進行役1名、さらに審判3名を基本として行う。最初に、相互にカードを出し合い、出したカードによって勝敗を決める。ただし、出すカードはデザインだけで判断することとし、異論があつた場合は皆で審議し、自身の感じ方を説明した上で、最終的に審判役の3名の判断を仰ぎ、勝敗を決する。ここで、審議の際に自分なりの感じ方や考え方を説明して判断を仰ぐという過程が、自分自身の感性を客観視しつつ、他者に伝えるために一般化される考え方や感じ



友達の作品評価から、新しい気づきもある。



制作されたトレーディングアートカード。

方と重ね合わせて説明する力も必要になる。

相互評価のあり方

今回の題材では、制作の途中や制作後のゲームの中で繰り返し、互いの作品についての解釈・評価が議論されることとなる。制作では、自分自身の形や色の感性を基に「石・はさみ・紙」のイメージから発想するデザイナーを考える。しかし、これは、自分の感性に基づいて制作したものであるため、他者とのゲー

ムを行う際に共通の感覚・価値基準に立つことができるものとは言い切れない。

このようなゲームとしてデザインが成立するためには、自己共に直感的に納得できるデザインであることや、論理的に説明することによって納得させることが必要になる。しかし反面、一目見て石・はさみ・紙が伝わってしまうデザインも、ゲームとしてのおもしろさを半減させてしまうことにもなる。したがって、それらのデザインは、直接的に表されたものよりも、より間接的に表現されたもののほうがゲームのなかで議論を生み、ゲームの場が活性化されるといえることがしばしば起こる。「えっ？これグーだと思っただけど…」「この色とこのあたりの形でチョキを表しているのでは？」「でも…全体的な形の組み合わせはグーに見えると思う」等々、部分や全体の構成、色の組み合わせ、形の組み合わせをいろいろ異なる視点で議論を深めていく。

この中で制作者である生徒も、自分の表現の中にあつた「無意識の造形のおもしろさ」を指

摘され、別の視点をもつことによつて、自分の作品の「新たな価値」に気づかされる。そしてこの「自分自身の内にあるキラリ」に気づくことが非常に重要な意味をもつこととなる。

造形活動の評価では、否定的評価よりも好意的評価が有効である。そして、その評価の着眼点が制作者自身の意図していたものと同程度に、意図していなかった着眼点について他者から評価されることは、制作者である生徒自身に新しい創造への道標となる。生徒にとつては、自分の中に新しい価値観が生まれることは大切である。

おわりに

逆説的であるが「子どものキラリはいつ・どこにでも存在する」というのが筆者の考えである。本人自身が自らの「キラリ」に気づき、周りの人も気づくとき、新しい表現が生まれ、造形活動が学習として深い意味をもつことができる。造形の学習では、既成の正解が存在するのではなく、子ども一人一人のキラリこそが、正解と呼べるものではないだろうか。

「子どものキラリを育てる」には

子どものキラリを育てるには、興味や関心へのアプローチを発達段階に応じて丁寧に行うことが大切であると考える。

子どもたちは興味や関心があるものに遭遇したときに目を輝かせる。その興味や関心は大人のちよつとした工夫や演出によって引き出せるのではないだろうか。

本校の美術室の棚にデッサン用の木馬の模型と人体模型がある。授業に来た生徒は必ずといってよいほどその模型の形を変えて楽しむ。目が輝く瞬間で



子どもの「楽しい」「うれしい」ひととき

東京都立三鷹中等教育学校 みなみ みお 南 弥緒

ある。ある日、前のクラスの生徒がつくったポーズに大変盛り上がった、たくさんの生徒が模型のまわりを取り囲んでいた。イタズラから生まれたキラリである。日常に変化を加えたり、仕掛けをすることは、子どもたちの興味や関心へのアプローチとなるのがわかる。

図工・美術の授業の中でどんなときに楽しい・うれしいと感じるか

小学2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・すごいものがつくれたとき ・友達よりもすごいものがつくれたとき ・自分でいいなと思ったとき ・友達と材料を交換しているとき ・完成したものを友達に見せるとき
小学5年生	<ul style="list-style-type: none"> ・でき上がったとき ・友達より目立つとき ・友達から褒められたとき ・上手につくれているとき ・先生から褒められたとき ・友達と材料を交換しているとき
中学3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい題材に入るとき ・褒められたとき ・選ばれたとき （参考作品やコンクールになど） ・順調につくったりかいたりしているとき ・でき上がったとき

では、授業の中で「キラリ」とするとはどういうことなのか、我が子に問いかけてみた。意外にも単純明快な答えであった。

キラリ＝楽しい・うれしいである。では、授業の中で、「楽しい」「うれしい」と感じる時はどんなときか。という問いかけには、発達段階により、少しずつ違いがあることがわかった。

小学校低学年では、周囲に認められることよりも、自身身が納得した作品をつくれたときのほうが、キラリとするようだ。それが年齢とともに、周囲から認められることがキラリとなるのがわかった。また、小

学生には中学生にない友達との材料の交換時間がすごく楽しいようだ。中学生になると資料準備はあっても、自分で材料を準備することがほとんどないためである。したがって、我々教師は、発達段階によるキラリを理解した上で、子どものキラリを育てたい。また、中学生は、小学生にはないキラリをもっている。新しい題材に入るときに一番キラリとすると答えた。これは、教師や題材への期待ではなく、「次の課題こそ頑張るぞ」という意気込みのキラリであった。自分自身でキラリを導くこともできる年齢になっていることがわかる。

授業の中での「キラリ」の仕掛け

それでは、教師がどのように授業の中でキラリを楽しんでいるのか、キラリのキーワードをもとに考える。

中学生であれば、新しい題材に入るときは、生徒自らキラ

リを導こうとしているときなので、導入は工夫をこらすことはもちろんだが、認めることを大切にしていくべきだ。

題材の初回は、質問や相談も多い。そんなときは、丁寧な対応が必要である。任せるのではなく、求めている資料を探す手立てや、生徒の発見やひらめきを絶賛する覚悟で臨むべきであ

	小学生 キラリの キーワード	中学生 キラリの キーワード	教師 キラリのアプローチ
導入	やりとり 発見 ひらめき	発見 ひらめき	<ul style="list-style-type: none"> 豊富な材料の準備 材料交換の時間の確保 懂れる参考作品の掲示 導入の工夫 制作手順の丁寧なレクチャー（説明）
展開 (制作中)	没頭、夢中	没頭、夢中	<ul style="list-style-type: none"> 十分な時間の確保 わからないときのヒント、アドバイスの提示 困っているときの手助け 認め、褒めるときの声かけ 静かな時間
まとめ	達成感 やりとり	達成感	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞タイムの確保 友達との交流の時間の確保



写真1

る。そうすることが興味・関心へのアプローチである。また、小学生は題材にもよるが、授業の最初と最後で、友達とのやりとりの時間を十分にとつての交感が意外にも楽しいひとときであり、キラリの瞬間である。意図的に材料交換タイムを設けたり、材料を交換するように準備させたりするなどのアプローチも必要かと思える。

このように、子どもたちのキラリを育てるには、興味や関心へのアプローチも必要であると発達段階に応じて丁寧に行うことである。子どもの思うキラリが楽しい・うれしいであれば、我々教師がとらえるキラリは、真剣な中の笑みでありたい。



写真2

写真1は、授業の中での中学生の没頭のワンシーンである。写真2は、同じように没頭しているが、その中で何人かが笑みを浮かべている。これが、教師が見逃してはならない、育てるべきキラリである。「真剣な中の笑み」は、集団の中でも、一人のときでも授業の中でつくることのできる。また、時間の経過がキラリを導くこともある。このような表情を見逃さぬようにしたい。

子どもたちが興味や関心に遭遇したときの、瞳孔がぐっと開くよう、我々教師も、子どもたちの興味や関心へのアプローチの間口を広げていきたい。

生徒の実態

「表現」にはコミュニケーションツールとしての側面と自分の気持ちや考えを整理する側面の二つの面がある。ただ、自身自身に自信がもてない生徒は、周囲から認められたいという気持ちとは裏腹に、自分自身が満足するためだけに表現を行い、他との関わりを避けようとする傾向がある。そこで、他と関わり、周囲から認められる場面を意図的に増やし、誰かのために行動することが自分の喜びになるという授業実践ができなにかを考えた。

他にどう見えているかという視点

個人作業の多い美術の授業で、他と関わる場面を設定するには、表現活動の中に鑑賞活動を計画的に取り入れていく必要がある。鑑賞活動によって他に自分の作品がどう見えたかを知る機会や他の生徒の表現の多様さに気づくことが大切だからだ。特に「他にどう見えているか」を知ることは、今まで気づ

社会とつながる表現

～共感の場づくりから～

やまたけ ひろき
山竹 弘己
静岡県静岡市立観山中学校

かなかった自分や成長した自分に出会うことを可能にする。これは海外旅行から帰ってきた人が感じる感覚にも似ていて、地元を離れてみると改めて地元が見えてくるのである。

共感の場

鑑賞活動では、生徒が互いの表現を知ることによって、共感の場が生まれる。表現に自信のない生徒や認められたいと感じ

ている生徒には、この共感の場が必要である。

共感の場では、自分の制作や作品が他からどう見えているかを知ったり、他の制作や作品が、自分と似ていたり、自分にはないものをもっていたりすることを知り、喜んだり、驚いたりする。共感し、驚いたり喜んだりするのは、目指す思いが同じだからである。人やものやいろいろな出来事に共通の思いをもつことを共感というのであろう。

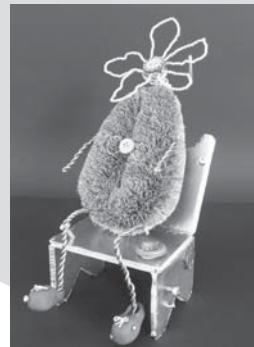
したがって、鑑賞活動で、ただ単に互いのよさを言わせているだけでは、双方がつながっていくことにはならない。

そこで、生徒の表現をいつもとは異なる見方で語ってくれて、目指す思いを同じくする人を学校以外で探し、授業の中に位置づけることにした。外部からの新鮮な意見は生徒の作品の見方を広げるとともに、目指す思いが同じ人たちとは共感が生まれやすいと考えたからだ。

今回は「共感」をテーマにした実践を三つ紹介したいと思う。

① 共感される場の設定

「タワシをインテリア雑貨にしよう」と題して授業を行った。タワシを解体したり、何かに見立てたり、さまざまな素材と組み合わせたりしながら、タワシを使っておしゃれなカフェに飾れるようなインテリア雑貨をつくるという実践である。



この実践では、タワシを制作している会社の方に協力を求め、生徒作品を見た感想をいただくことにした。生徒一人一人に社員十数名の方から「どのように見えたか」や「作品のよさ」について感想をいただくことができたので、鑑賞の授業では互いの感想を述べるだけでなく、社員の方からいただいたコメントも紹介していった。中には「繊維の使い方がユニークで驚きました。ぜひ、作品を飾らせてほしい」「タワシの色を変

えるだけで印象が大きく変わることに気づきました。繊維の色については開発を進めたい」など、生徒作品に大きな刺激を受けたことがわかるコメントもあり、感想をいただいた作者だけでなく、他の生徒も新たな作品の見方に驚きを感じながら、自分の作品に対するコメントを楽しみに待つことができた。

② 共感し、共感される場の設定
地元商店街の広告マッチを制作する授業では商店街45店舗の協力のもと、協力店の方にクライアントになっていただいた。生徒はクライアントの思いや考えを汲み取りながら広告マッチのデザインを考えていった。この実践では、クライアントのもっている映像イメージや思いなどをどうしたら汲み取れるかということを生徒に意識させた結果、ことばでイメージを共有することの難しさを生徒に実感させることができた。また、同時にクライアントへの共感的な姿勢を深め、クライアントとの関わりの中で浮き彫りになってくる自分自身の好みや思いも明確にすることができた。そして、



完成時には生徒はでき上がった広告マッチを納品と称して各店舗に展示していただいた。この際に各店舗の方からは「思っていた以上のマッチでうれしい」「ちゃんと伝えたことを取り入れてあってうれしい」「こんなかわいい広告マッチになったんだ」「お店の商品として販売したい」などと生徒の自信につながる声かけをしていただき、両者から笑顔が溢れた。

③ 共感する場の設定

「『ゲルニカ』からのイメージ」と題した実践では、ピカソが生きていたら福島の状態をどう描いたかを、「ゲルニカ」を参考に考え、表現する授業を行った。最初に行ったのは「ゲルニカ」の鑑賞である。ピカソがなぜ「ゲルニカ」を描いたのかを考えさせる活動を通して、表現の根底

にあるピカソの戦争への強い憤りや悲しみに共感する場や福島の状態をつかむ授業の中で、福島で生活する方に共感する場を設定した。

この実践で印象的であったのは、ピカソの「ゲルニカ」鑑賞までは戦争に対しても他人事であった生徒が、「ピカソが生きていたら福島をどう描いただろう？」という投げかけをした瞬間に目の色が変わり、ピカソの性格をイメージしながら戦争に対しても放射能汚染についても自ら積極的に調べていくようになったことだ。また、美術作品で「福島を忘れさせない」というメッセージを多くの人に伝えることができるという思いを強め、作品制作に臨むことができたように思う。

現実社会とつながる

学校で行われる美術の授業が社会と共感的な姿勢でつながることを目指して実践を行う中で、他者から認められることに飢えている生徒の実態が改めて浮かび上がってきた。SNSなどを巧みに駆使して他とつなが

ているはずの生徒が、現実の世界においては認められることに飢えているのである。改めて現実社会で具体的につながり、共感の場の重要性を実感した。

現在、本校では宮城県の津波被害を受けた幼稚園と交流をしており、授業ではその園児を笑顔にするプロジェクトと称して段ボール遊具の制作を行っている。幼稚園の園長先生をはじめ、保護者の方には被災地の実態を本校生徒に紹介していただき、生徒は震災が終わっていないことに気づき、震災のことを忘れてはいけないことを実感した。今回はこうした被災地の方の思いに共感した生徒の思いを具体的な行動や物として表すことで、さらに被災地と生徒を近づけていくことをねらった。

生徒はグループに分かれて遊具制作を行っているが、今まで関わりの薄かった生徒とも意見を交わしたり、うまく役割分担をしたりしながら行っている。被災地の園児が自分たちの遊具で遊び、笑顔になってくれるようにという共通の思いをもつて。

授業って何だ？

今回、「子どものキラリを育てる」というテーマをいただき、私は正直戸惑った。この時、授業づくりに葛藤していた。「キラリ」とした授業ってどんな時だろうと脳裏をよぎる。

授業づくりについて考え直すきっかけは、「中学校美術Q&A」への参加、「えっ？『授業』の展覧会―図工・美術をまなび直す―」への出展や会場に足を運んでからである。

また、自分と同世代の美術教師たちが、各地域で精力的に活躍していることがインターネット上のホームページやSNS等で紹介され、授業の価値を考えることが増えたからでもある。

このような背景から、自分の授業で生徒たちが「キラリ」とする授業場面を振り返ってみた。

自己決定・判断する授業

自身は、各題材に必ず自分で判断し、選択し、表現する機会を設けている。例えば、材料、テーマ、描画材料、作品に貼る

児童・生徒がキラリと輝く授業

宮城県登米市立佐沼中学校 矢崎 ひさ やさき

台紙などである。

個々の生徒が自分の表現に見合ったものを判断し、選ぶことで、一人一人の表したい思いを受けとめ、生かすことができるように活動させたいと考えている。

第1学年のスケッチ指導では、複数の描画材料を用意する。鉛筆で描く生徒以外に、筆ペン

で描くことで筆圧を加減して描いたり、パステルを用いて、柔らかな雰囲気を楽しんだりする生徒は多い。

また、時間を提示し、描くモチーフを自分で決めさせることで、限られた時間の中で自分が描くことができるモチーフを探し、それらの雰囲気が出せるように、描く角度を考えて題材（モチーフ）を決めて配置し、観察して描き表している。自分で決めた題材に愛着をもち、じっくりと観察して表せたスケッチは、達成感を与え、生徒たちの表情は「キラリ」と輝く。自分の作品を友達に見せ、「難しかった」「きれいだねえ」「向かいの席の友達の題材を見て、「すごいね！描き込みに集中力があるねえ」と感心される生徒もいる。

入学後間もない頃、学級の友達に褒められ、また異性から褒められれば、生徒たちは照れ、さらに学習への意欲も高まるものである。

また、作品完成後に、自分で台紙の色を選択させる機会も設けている。校内の壁面に展示



をするとき、同じ色の台紙で並べると、どこもなく単調になりがちだ。このようなことを避けたくもあり、台紙や固定する紐類は複数の色を用意して選ばせている。作品を完成させ、台紙を選ぶ時、生徒たちは楽しみながら選んでいる。「きれいだし、迷うなあ」「目立つ色合いってなんだろう」友達と台紙を並べて仕上げる。作品を完成した達成感もあり、自己評価にも満足したことが記されている。

「できた」が得られる授業

美術の授業に限らず、児童・生徒たちは自分でできるようにになりたい。私自身は、美術が得意と言う生徒に対して、授業中に声を掛ける機会は少ない。逆に、「美術は苦手だ!」「できないし!」と、授業に嫌悪感を示している生徒に、声掛けや対話から授業に向かわせることが多い。

発想・構想を深める時間である。発想・構想を深められない生徒もいる。「どうしたい?」なんて語り合っていると、「サツカীগラウンドで寝転んだ絵にしてみたい」「格好いい形にしてみたい」等々伝えてくる。

表現したい思いや願いを受けとめたい。そこで、「格好いい形って?」と問うと、「わからない」「やら、「鋭い感じかな」といった返答もある。「ならばこんな感じ?」と提示すると、「それそれ」と、徐々に関心を示し、活動に興味をもち始める生徒もいる。やはり自分のつくりたい形や想起した色合い、表したい雰囲気表現できたとき

に、生徒の表情は「キラリ」と輝くのだ。

技術指導でうまくつくる・描けるより、多様な表現事例を紹介するだけで、自分でもできる可能性に喜びを覚え、生き生きと取り組む。

認められる場がある授業

生徒は、身近な人に褒められるとよい表情を見せる。作品から生徒理解につなげたいこともあり、授業の成果は校内の壁面に掲示している。休憩時に、他学年の生徒が作品を鑑賞して語り合っていたり、上級生の作品を見て憧れを抱いたりもしている生徒も多い。

作品完成後の鑑賞会では、生徒たちは、気合い十分で美術室に入室する。友達の仕事を見る・知る機会である。友達がどんな工夫をしたのか聞きたい生徒も多い。「俺に指名して!」と伝えてくる生徒もいる。発表後、その生徒が一生懸命頑張っていたところを紹介すると、聞いていた生徒たちからも歓声や拍手もある。発表した生徒は照れもいるが、発表後は満足げで「キ

ラリ」である。

私自身は、「キラリ」を見つけるために、アイデアスケッチや対話を通して、生徒理解に努

めたい。これを通して、授業の「キラリ」につなげられるよう、日々の授業づくりを大事にした



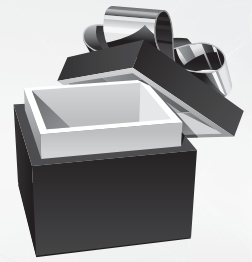
お気に入りが多すぎる

私はお気に入りが多すぎる。モノへのこだわりはあまりないと公言していますが、周りから見れば結構こだわっているように見えるようです。本人はこだわっているつもりはなく、興味をもっているだけなんですけど…。つまり、いちいち感心させられるモノが世の中には溢れています。

お箸専門店にて

もう、十年以上前になるでしょうか、お箸専門店が街なかでちらほら見受けられるようになりました。もちろんもっと前からあったのでしょうか。あくまで私の目に着くようになった時期ということだと思います。しかし、入ってみようという気にはなかなかありませんでした。第一、当時は、お箸専門店はお客さんのほとんどが女性で、男性は女性に連れられて入って来ましたという顔をした人ぐらいです。もちろん、私もその一人です。その上、「お箸買うぞー」と意気込んでいるお客さんなど見受けられず、まあ、ですから何気なく入店できるわけですし、店員さんからも「よし、売るぞー」といった気合いを感じることはありません。

それにしても、多いですねえ、種類が。こんなに多い必要があるのかなとさえ思



私のお気に入りの1点

五角形の箸

います。なのに、見ているうちに、そこその値段のものがよいと感じられるようになる、つまり、それなりの審美眼が出来上がるのが人間の性でしょうか。結婚式などの貸衣装で一番安価なものをまづ見せられ、ご参考までにと一番高価なものを見せられると、もう「一番安いのでいいです」と言えなくなってしまうのは、私だけではないと思います。まんまと相手の術中にハマっております。ま

ちよつと内容がズレてきましたね。
お箸は、私たちが毎日使う道具です。また、一度買うと数年、いや、以前使っていたお箸は二十年近く使っています。そして、壊れたわけではなくいまだに食器棚の引き出しに入っています。その上、一世一代限りです。誰かが受け継いだりしません。そう考えますと、自分だけのモノとして、もつとこだわるべき道具ではないでしょうか。手に収まる身近な造形物として。

私のお気に入りの1点の誕生

一応、学校では工芸、それも木工を専攻し、卒業後も茶入れなどゴソゴソつくっていたので、少しは、木材や道具の知識はあるつもりでした。お箸の材料は、木や竹が主ですから、もつと早い時期に興味をもつべきでしたが、素材やつくり方について考えたことはありませんでし

た。
私が長年愛用していたのは、江戸唐木箸（私ののは、鉄刀木という木材）にカテゴライズされます。塗りは施されず、木地のままで、八角形の断面です。八角形は四角形の角4か所を均等に削れば八角形になるであろうことは想像がつきます。

しかし、私は、この何気なく入ったお箸専門店でお箸に目覚めることになりました。それは、まず、美しい五角形のお箸を目にしたことから始まります。「うん…? どうやって削るの?」先にも述べましたが、四角形、六角形、八角形ぐらゐまでなら、皆さんも想像つきますよね。私も実際お箸用の鉋台など目にしたこともありません。が、五角形となりますと、かくだけでも結構大変です。まして、美しく削るのは…。そう考えると、この六千円は安い。だって、削り方がわかんないもん。ところが、その横にはなんと七角形が…。こうなると、もう、かき方すら私にはわかりません。正七角形ですよ。

ここまで感心したからには、もう購入するしかありません。あとは、五か七の問題です。お店の方に素直に尋ねてみました。「七角形ってどうやって削るのですか」とすると、ここぞとばかりにいろいろと教えてくれました。まず、五角形を

これだけは 知っておきたい

木編

“木”はごつごつした幹、節や木目などがそのままになっているもの、“材木”はその自然の木を柱や板状に製材したものや薄板を張り合わせた合板とかベニヤのことです。“木材”は植物としての木の中で材料として使える部分の総称。“木”や“材木”はさまざまな工芸や建築材料として使われます。また板状の材木では木取りで、まさ目と板目が出ます。

まさ目は、木目が板面に対して平行です。板目は木目が曲線や斜面です。

年輪の外側ほど含水率が高くなるので、まさ目では芯から遠い部分が痩せますし、板目では外側が反り上がります。さらに年輪に関して、順目、逆目があります。根の方から上の方へ加工するのは順目、一方、木目に逆らう逆目の加工ではよく研いだ刃物が必要になります。木の特徴を理解して道具類を選びましょう。

よい道具では木の香り、木肌、色合いが楽しめます。

つくり、そこから七、九と角を増やしていくそうです。ということは、基本が五角形になります。うん、五角形にしよう。そして、それぞれを手に取りますと、馴染みます、これが。五も七もです。お箸は基本3本の指で支えるので、奇数が安定するのだそうです。なんとなく納得しますねえ（じゃあ三角でしょ。と、余計な疑問はもたないこと）。

正直に白状いたしますと、私は箸がうまくもてません。「こんな人間に語られたくないわ!」と、お箸に言われそうです。購入後、そんな私でもうまく素麺が掴めることが判明したのです。よくよく観察しますと、五角形のお箸は、面と面が合うのではなく、お箸の面と角が絶妙にかみ合い、麺が滑らず掴めるのです。ここに、造形的美しさと機能の両面をカバーした私のお気に入りの1点が誕生し

東京都江東区立越中島小学校

おおみちひろとし 大道 博敏

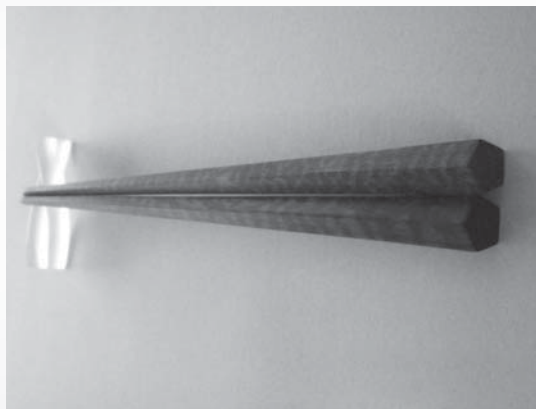
身近な楽しみ

たのであります。ちなみに私が購入したのは、葛飾の職人さんの手による、先まで五角形の名品で、材料は南米産スネークウッドという妖艶な輝きを放つ、私一代限りの一品です。

先程、お箸屋さんにてこれほど種類が多い必要があるのかと述べましたが、あります。産地ごとに材料が違い、装飾も変わります。また、食材の特徴などから形状にも影響があったのでしょうか。しかし、多種多様なお箸があることで、見方を変えますと、その人ならではの一品を選ぶことができます。数百円から楽しめる日常の一品です。種類が多いのは、私たちが特別なものや高価なもの、珍しいものだけに価値を認めるのではなく、日常の生活の中に美を見出し、豊かに生き

ていこうという気持ちの表れでもあるのでしょうか。

身近に感心させられるモノが多い、お気に入りが多すぎる所以です。



小学校 教材研究

和の図工 —図工の和—

東京都豊島区立長崎小学校 きたずみ 北角 きよ子

はじめに

ここ数年「和の図工」というテーマで、幅広い意味での「和風」を意識した題材開発を行ってきた。

さまざまな文化の影響を受けながら、それらを吸収し、洗練させてきた日本の文化だが、現代では和洋折衷が混在するなかで、あえて意識しないと見えにくくなっている「和の文化」。生まれたときから和も洋もなく影響され、内面化してきているであろう子どもたちに改めて「和」のよさを感じ取ってもらい、さらに豊かに育んでいってもらいたいという願いがある。「富士山」や「和食」が世界遺産に登録されたという最近の話題なども交えながら取り組んだ題材である。

題材について（6年生）

本題材は「墨のうた」、「レインスティック」、「はさみのドライブ」の3題材が関連し合っけて展開していったものである。

① 墨のうた

「来週はみんなに筆をつくってもらおうよ」「ぼろ切れでもスポンジでも木切れでも、墨をつけて描いたら面白そうだと思っものを持って来てください」と投げかける。当日は「こんなのでもいいかな」とこちらの予想範囲をこえた材料が集まった。墨をつけやすくするために割り箸などで柄をつけ

る。筆らしい雰囲気になったところで、新聞紙や半紙に試しがきをしてみる。にじみやかすれの美しさ、面白さを味わい、「じゃ、これでいこう」という人から「マイ筆」で製作開始。保護者から寄付していただいた大きな和紙に、贅沢に描く。立派な和紙に描くに当たって、「和紙」の簡単な解説を加えた。「和食」「和菓子」「着物」「和風建築」などを例示したところ、子どもたちは「ああ、そうだったね」「なるほど」という反応。友だちの筆と交換してもよいこととし、のびのびと気持ちよく描いて完成。廊下に展示すると、担任や主事さんに説明する様子もみられた。



② レインスティック

レインスティックは、サボテンや竹など、国によって材料は違えど、筒状のものの中に種や小豆、米などを入れ、音を奏しむ楽器状のもの。小雨の降る音（さざなみの音に近いが）に似ているので、レインスティックと呼ばれる。

実物のレインスティックの音を楽しんだ後、自分たちも製作することになった。

使う材料や道具は、いろいろな紙筒、竹ひご、



製作途中、音を試す



墨と柿渋で描いた和紙を巻く



出来上がった
レインスティック



新聞紙、和紙、中に入れる米や小豆、大豆、蕎麦の実や砂。穴を開けるためのくぎ、金づち。洗濯のり、柿渋。

自分の気に入った紙筒を選び、くぎで穴を開けていく。竹ひごを短く切り、穴に差し込む。筒の片方を新聞紙で塞ぎ、手のひらサイズの新聞紙を筒の周りに貼る。筒の中に米や小豆などを入れる。開いていた方も新聞紙を貼って塞ぐ。

さらに白い紙を貼り、絵の具などでカラフルに仕上げてみようが、今回は、先行経験のある「マイ筆」を使い、墨と柿渋で描いた和紙を貼る。柿渋は日本古来の塗料で、始めは半透明だが、描いて時間が経つと茶色に変色し面白い。子どもたちは、描いて次の週に色が変わっていることの不思議さに驚いてくれる。

完成させてから、みんなで音を聞き合い「癒されるね」と感動する。

③ はさみのドライブ

「マイ筆」をつくるときに試しがきをした和紙や和風の包装紙などを使って、はさみで切り抜いたさまざまな形の紙を構成する。実に無駄がない。子どもたちは「エコだね」と言ってくれる。

この題材ではあえて「和風」を強調して提案はしなかったが、出来上がった作品は、「和風モダン」といった仕上がりになったのが面白かった。

感想を聞くと、形や色を意識して「かっこいい画面にした」「模様が気に入ったので生かそうと思った」などと伝え合っていた。



おわりに

今回紹介させていただいた題材は、飾ると、和風の家にも洋風の家にもそれなりに合いそうな作品に仕上がっていた。

墨がもっている力と、子どもたちの中で消化されている「和」の力が解け合うようにして表出したものなのか、興味深い3作品となった。自国の文化を愛し、理解することができ、他の国の文化も理解し、愛せる心豊かな国際人に未来を託したいものだと思う。

自分や自分のいる場所に向き合い、輝きに気づく

東京都西東京市立保谷中学校 しみずのぶひろ 清水 信博

はじめに

美術の授業は、ほぼ週に一度しかない。したがって、生徒にとって学校という日常の中の「非日常」を演出したいと思っている。生徒たち自らが、自分たちの無限の可能性を発見し、自身の限界に挑戦するのが、制作であり鑑賞である。

1940年代、ジャクソン・ポロックは寒い冬の日に、冷え込むアトリエで「ドリッピング」技法を開眼（発想）した。作品は現代絵画の新しい潮流を拓いた。

そんな素敵な閃き^{ひらめき}がどの生徒にも平等に、また、いつでも起こり得るような美術の授業でありたい。

美術科の教師にできること、それは生徒たちが潜在的にもっている「素敵な閃き」を自由のびのびと開花させてあげること。生徒たちが既成概念を壊し、発想のリミッターを外しやすくする「題材設定」であり、「題材の提示方法」である。言い換えれば「いかに、生徒が主体的に主題を生み出す環境づくりをするかについて」工夫を凝らすか、ということがポイントである。本稿では上記の観点から、これまでの授業実践を二つ紹介する。

題材について

「オリジナル画板」

身につく力：自分らしさの探求と表現、レタリング、文字デザイン、グラデーショ

ング、文字デザイン、グラデーショ
ン着彩の技能

通常、美術室の作業机を汚さないため、机の上に新聞紙を敷く。しかし、敢えて教材として自分の画板を購入（1350円）し、それを作品の下に敷かせて作業する。このようにして、3年間の美術の授業では、写生の際、また粘土制作、木彫など全題材で、その板の上で作業をする。

その「私の美術作業板」にレタリングで自分の名前をレイアウトし、一文字デザインして、グラデーションの着彩をする。（表面は、透明な外壁塗装用の強力塗料で保護する。）その際、以下のように段階的に課題を経る。

A 三原色＋白で30色つくる色学習。（3時間）

B 描画材料などの使い方について文章で振り返る小テスト。（1時間）

C プリントでのゴシック体、明朝体のレタリング技能の修得。「永」字他（3時間）

D 期末考査で自分の名前から、一文字選んで文字デザイン。（1時間）。また、期末考査の作品を、評価を踏まえてもう一度授業内で、デザインし直す。（1時間）

E ポスターカラーでのグラデーションの着彩技能をワークシートで修得。（2時間）

F 制作（下絵は宿題にする）（6時間）
G 鑑賞（1時間）

生徒の様子

自分の名前の由来などから、自己の内に深く向き合うようになった生徒が増えた。例えば、動物好きで獣医になるのが夢だと言う女子生徒は、画面の右上に「白鳥」を、左下に「黒猫」を描いた。意味を尋ねると「自身を締めで晴れ晴れしたところと、わがままで人を困らせるところを表現した」という。

その他、自分らしさを意識して、貝殻を貼り付けたり、色や模様をついたマスキングテープを貼るなど、等身大で身近な装飾を工夫する生徒が多かった。

また、作品完成までの学習課題が多い中、レタリング、グラデーション、文字のデザイン、何か一つを得意として、その部分だけでもこだわるといふ生徒もいた。作品展示、鑑賞の際は、個性の百花繚乱となった。



課題

自己を表現するための切り口が多い反面、生徒が興味をもてなかった表現については、打ち込めなかった。背景を頑張って描いて、レタリングがおざなりになる等。

「私のいる場所のよさを写生する」
身につく力：地元を写生を通して再発見
する。風景画の基礎技能。

自分の住んでいる環境を風景画として表すことで、それまで何気なく見過ごしていた、「自分がいる場所のよさや美しさ」に気づく。アイデンティティの確認、自己肯定感の強化を狙っている。

前任校は、東京から180 km離れた伊豆七島の中心に位置する「神津島」だった。周囲の大自然の美しさに無自覚な生徒が意外と多かった。他地域同様に、自己肯定感が低い生徒も多かったの



で、この題材を設定した。1年時の色づくり学習を生かして、海の色や、空の色をよく観察し、三原色だけで写生する。構図は、水平線の位置を工夫する。世界に向けて広がる海の大さを表現するようにした。神津島は水平線の上には、ほとんど何もなかったからである。神津島では3時間連続屋外での写生の授業を実現した。

現在の任地では、大きく立派な桜の樹が校庭に多くある。4月末、ギリギリ散る前に、描く「句の題材設定」をすることで同じことを目指した。「何を描くのか」という主題は班ごとに話し合い

をして共通のものを決めた。授業4回分、毎回屋外で写生をした。

生徒の様子

前任校では、元々地元が大好きな生徒はより熱心に描いた。環境に比較的関心のない生徒は、風景画鑑賞の際にその美しさについて気づきがあったようだ。

「波と砂浜だけ描いた。毎日見ているが、2時間以上絵を描くために真剣に観察したことは今までなかった。やっぱり私は島が好き」「暑くて、だるくてあまり集中して描けなかったけれど、鑑賞したら、きれいな絵がたくさんあった」

現在の任地では、4月半ば、桜が散る直前から描き始めることができた。季節感があり、ほとんどの生徒が熱心に絵を描き始めることができていた。「光が差し込んでいるところがすごくきれい」「桜の根が、力強くのびやかだった」と。

おわりに

卒業間際のある女子生徒が「美術は発想が大事」と言っていたことがあった。彼女の直感が、3年間の学びを、その言葉で表現したのでろう。

既成概念を越えた発想力は美術科の領域を越え、生活全ての営みに「新鮮な価値」をもたらし知恵につながる。生徒が、授業での制作や鑑賞を通して培った力で、普段の生活の中から、より柔軟に、より多くの事柄から、「生きる歓び」を感じられるようになってくれれば幸いである。

小中一貫校の試み ～小学校と中学校の連携～

新潟県三条市らんなん立嵐南小学校 島田しまだ 洋子ようこ

小中一貫教育が叫ばれて久しいですが、勤務校では、今年度、小中の一体校としてスタートしました。教務室も1フロアで、行き来ができます。小中で連携した授業を模索してきましたが、図工・美術科でも連携し、授業実践を行ってきています。今回は、5年生の鑑賞学習で連携を行いました。

児童のほとんどは、美術館を訪れた経験がなく、有名画家の名前なども知りません。そんな実態ですが、9年間の学びの中で、自分や友達の作品鑑賞から、芸術作品や文化遺産への鑑賞、具象的な作品から、より抽象的な作品の鑑賞へと移行していく必要があります。

今回は、ピカソの作品「泣く女」を

鑑賞教材としました。抽象絵画ですが、描いてきた自画像や人物像と比較して鑑賞できること、画面から具体的なものを見つけられることなどから、大変取り組みやすい鑑賞教材です。児童には、題名や作者は知らせず、何が描かれているか問いました。中央の「白いハンカチ」、「噛みしめた歯」、「具体物を連想させる目」、「こぼれ落ちる涙」など、画面を注視することで題名が予想されます。児童は、発見の喜びに満たされます。そして、描かれたものが「泣く女」であること、「泣く女



小学校図工教師から



中学校美術教師から

の状況」などを推測する楽しみも味わうことができます。その後、中学校教師からピカソの作品にまつわる話や中学校へつながる抽象絵画についての話を聞くことができました。なかなか時間確保が難しい共同実践ですが、「小から中」へ、「中から小」へと連携を続けていきたいと思います。

図工室 美術室

心あたたまる絵本をつくろう ～自分を見つめ、自分を語る～

北海道札幌市立とうりょう稲稜中学校 市川いちかわ 雅基まさき

感性を働かせ、生徒それぞれが表現意図をもって制作に取り組み、作品に自分なりの意味や価値をつくり出すことができる題材は何かと考え、中学2年生では本題材を設定しています。

この題材では、自分の体験や経験などをもとにして主題を設定し、透明水彩でのびのびと表現させることを目的としています。また、最も大切にしていることが「自分を語る」ということです。

思春期に入ると自分に自信がもてなかったり、周りの目が気になって自分を見失ったりと自己肯定感が一時的に低くなる場合が多々あります。そんな時期だからこそ、自分自身と向き合い、自分を語るということに大きな意味があると考えています。

イメージづくりの段階では「14年

間で感動したこと」や「思わず笑顔になったこと」など記憶に残っていることを書き出し、4人1組のグループで交流します。その中から絵本としておもしろそうなストーリーを選び、あらすじを考えます。次に、主人公などの登場キャラクターを考えます。登場するキャラクターはすべて「擬人化」することが条件です。鳥獣人物戯画でも表現されているように、あえて人間以外のキャラクターにすることで生々しさは消え、物語にほほえましさやのどかさが出てきます。

最後に、コマ割り（絵コンテ）を考えます。基本的な考え方として「起承転結」の4コマでストーリーの大枠を考えますが、最終的には6コマで完結するストーリーにして仕上げます。

制作段階では「透明水彩」の技法

を身につけることを目的とします。小学校での画材体験をベースにして、重色やぼかしなど基本的な技法を意識して表現することで驚くほどのびやかに着色する生徒が増えてきます。

作品完成後には、絵本の読み聞かせ交流会です。絵本のよさは絵の美しさもさることながら、表現方法に合った味のあるキャラクターや見せ方に、子どもたちからは関心の声も上がっていました。

この題材を発展した形で3年次には卒業を前に「15歳の自分を表現する」というテーマでミクストメディアの制作に挑戦します。感動や喜びは人の内面に生まれ育つもの。これからも主体者の内面に重点を置いた活動を通して、生涯美術を愛好していこうとする心情を育てたいと思います。

今月の

見つけたよ!



作者：

私が選んだ木は武道場の裏の「イチョウの木」です。木の肌がゴツゴツして、ツタがからんでいるところが気に入りました。背景の土手の草の表現が結構難しく、美術の時間に鑑賞した屏風絵をヒントに、金色の背景と青い川を描きました。

指導者：

中学1年生の風景画では奥行き表現が難しいと感じている生徒が多く、興味をもった対象にできるだけ近づき、大きく表現させます。背景の処理は主題に合わせて変えてもよいとしました。今回は途中で尾形光琳やコローの作品鑑賞を挟み、表現の幅を広げる手立てを試みました。

「川立つ木」

千葉県木更津市立木更津第一中学校 1年

地域のアート

「小・中・高連携による造形活動 ～はらぺこあおむしの食べたリンゴ～」

秋田県能代市立二ツ井小学校 佐々木 彰子

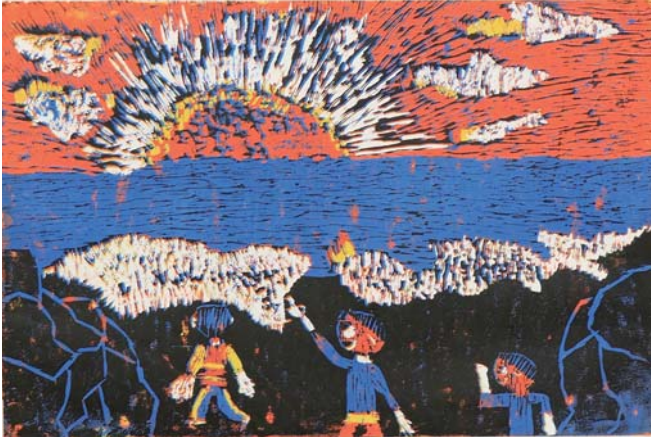
地域の小・中学校各校にて、はらぺこあおむしの食べたリンゴはどんなものかイメージして制作しました。展示をする中で、アンサー作品として、地域の高校生に、リンゴを食べたあおむしがどんなチョウになるのかをポストカードに描いてもらいました。



チョウの絵を描く高校生



リンゴを制作する中学生



「輝く朝日の前で」
(彫り進み木版画 / 30×44cm)
福岡県北九州市立筒井小学校 5年



「マグネットマスコット」
(軽量紙粘土、モール / 高さ4～7cm)
千葉県流山市立流山小学校 2年



「大きな世界」
(水彩絵の具 / 54×38cm)
青森県弘前市立第五中学校 2年



「猫」
(新聞紙、芯材 / 高さ26cm)
福井県坂井市立坂井中学校 1年



開隆堂出版株式会社
本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03-5684-6111

北海道支社 〒060-0061 北海道札幌市中央区南一条西6丁目11番地札幌北辰ビル8階 ☎011-231-0403
東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区萩野町1-11-1 萩野町Mビル2階 ☎022-782-8511
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市千種区星が丘元町14番4号 星ヶ丘プラザビル6階 ☎052-789-1741
大阪支社 〒550-0013 大阪府大阪市西区新町2-10-16 ☎06-6531-5782
九州支社 〒810-0075 福岡県福岡市中央区2-1-5 F Y C ビル3階 ☎092-733-0174